



つぼ た けん いち
坪田 建一さん

(ジェネシス オブ エンターテイメント代表)



ダンスという文化活動から “お互いさま”といえる 社会を目指して

障害のある友人に立ちはだかる壁

障害のある人とない人がペアを組み、さまざまなジャンルのダンスを踊る「車いすダンス」。ジェネシス オブ エンターテイメントは、「障害の有無に関わらず、共通の生きがいを創造する」を目的に活動する市民団体である。代表の坪田建一さん自身は“健常者”だが、高校時代の親友がバイク事故で脊髄を損傷、車いす生活になったことがきっかけで障害のある人の問題について考えるようになった。

「でも最初はその友だち以外の障害のある人と接するのが怖かったですよ。それまで接したことがなかったし、コミュニケーションの速度も違う。違いばかりが目について、話ができなかったんです」。一方で、車いすを使う友人と街に出れば、彼にはさまざまな壁が立ちはだかるのを目の当たりにした。レストランに入れば通路に座らされる。消防法を盾に入店を断られることも珍しくなかった。事故以前から夜な夜な出かけていたクラブへの入店を断られた時は、仲間たちと猛烈に抗議した。

孤立させられる“障害のある人”

ところが、ふと車いすの友人に目をやると、一番怒りを感じているはずの彼が身を縮ませている。「その時、怒ったり、くっつかかるだけでは何も解決しないと思いました。障害があっても人生は楽しめるはずだし、みんながみんな障害のある人への差別をなくす活動に取り組みなくちゃいけないということもない。障害があっても何気なく生きられる社会を自分たちでつくってやろうと決意しました」。活動の柱にダンスを選んだのは「自分たちがやりたかったから」。あくまで自分たちが楽しむことにこだわった。

「障害のある人もない人も一緒に」と始めたが、当初は障害のある若者とのコミュニケーションにとまどった。話しかけても返事が返ってこない。こちらの目を見てもらえない。「なんで話してくれへんねん、向き合っ

てくれへんねん」と突き詰めていくと、孤立させられる障害のある人の姿が浮かび上がってきた。「なかには、学校でいじめにあったり、話をしてくれないクラスメートも少なくないみたいなんです。先生の協力もあるんですが、“自分から話しかけるんだ”と言われ、自分でできるならそうしているのに、相談できる人がいなくなり孤立している。会って間もないぼくに心を開きにくいのは当然だったんです。」

一緒にいることでお互いに成長できる

就労なども含め未ださまざまな社会的課題のある人に、ダンスが何の力になるのか。10年やってきた今も自分に問い続ける。だからこそ講演活動も積極的に行ない、「誰もが人として輝ける社会を」と訴えてきた。一方で、一流のダンサーの指導を受けるなどダンスの技術を磨くことを怠らない。しかし残念なことに、福祉の世界で認められれば認められるほど、ダンスに対する評価がおざなりになる。良くも悪くも、主催者からダンスの内容や質を批評してほしいという想いがあるのだが、無条件に良かったよ！という言葉だけで終わってしまうことも少なくない。

「だけどもまっすぐに評価してくれる人もいるから、ぼくもがんばれます。“障害のある人とない人”を助けてもらう側・助けてあげる側という関係に固定してしまうのはもったいない。一緒にいることでお互いに成長したり、変わることができるんです。ぼく自身も障害のある仲間を支えられていままでやってこれました。“お互いさま”そのことを伝えていきたい」。坪田さんはそう言葉を結んだ。

【事務局】〒542-0065 大阪市中央区中寺1-1-54
大阪府ボランティア・市民活動センター内
電話：06-6762-9631 FAX：06-6762-9679
携帯：090-4030-9540 E-mail：tsuboken@genesis-art.com
ホームページ：http://www.genesis-art.com/